
あの星空の下で

加那 翔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの星空の下で

【Nコード】

N3730U

【作者名】

加那 翔

【あらすじ】

「ー大きくなたら私と結婚してくれませんか？」「君が大きくなっても僕のことを忘れてなかったらね」

「絶対に忘れません。このネックレスに誓って」

主人公、水無月^{みなづき} 蓮^{れん}は幼少時代、名前も知らないある少女と星空の下で結婚の約束をした。

ーこの物語は、それから10年後……蓮^{ストーリー}達が高校生になってから
の話。

色々と矛盾点があったので、改正しています。

キャラ紹介（前書き）

このページで紹介するキャラは随時、追加します。

・8月12日 生徒会長の紹介を追加しました。

そして作者が間違っていた点も変更しました。

生徒会長は3年生ではなく、2年生です。

……自分で書いてる作品なのに、なんで間違っんだろ？

キャラ紹介

水無月 蓮 みなづき れん

性別 男

年齢 16歳

所属 私立聖華高等学校1年A組。

容姿 肩口まで伸ばした鮮やかな黒髪。

体型は可もなく不可もなく標準的。

補足 本当の両親は14年前に転落事故で死んでおり、

親戚に育ててもらってたんだが、その親戚が死んでしまい。

孤児になった。

そんなとき、拾ってもらったのが水無月家の人で、

本人はその恩を返すために両親の仕事を手伝っている。

水無月 優奈 みなづき ゆうな

性別 女

年齢 15歳

所属 私立聖華高等学校1年A組

容姿 茶髪のポニーテール。瞳の色も髪と同じで茶色。

そして胸は小さすぎもなく大きくもない。

補足 蓮の義妹。だが蓮に恋心を抱いている。

そのためか家事はすべて自分が受け持っている。

佐倉 理恵

性別 女

年齢 15歳

所属 私立聖華高等学校1年A組

容姿 茶髪のショートボブ。体型はかなりいい方。

だけどある部分だけ残念。……良くいえばスレンダー

補足 幼い頃、偶然出会った少年に再開したいと願っている美少女。

少年とは4〜5回あった事があるのだが、2人とも名前は言わなかった。

その代わりといってはなんだが、少年は少女にネックレスを渡している。

篠崎 深琴

性別 女

年齢 16歳

所属 私立聖華高等学校2年A組

容姿 黒髪でポニーテールにしている。

体型はモデルをやってもおかしくないレベル。

補足 聖華高等学校の生徒会長。

そして水無月蓮の元クラスメイトでもある。

相川 奈緒

性別	女
年齢	15歳
所属	私立聖華高等学校2年A組
容姿	桜色で軽くウェーブのかかった髪型

プロローグ く出会いく（前書き）

初めまして、シヨウという者です。

現在は加那 翔です。

初投稿ですので、色々と間違っているかもしれませんが、
初心者なりに頑張っていきますので、よろしくお願いします。

では、本編へどうぞ

プロローグ く出会い

「はあ、不幸だ……」

俺、水無月 蓮はごく普通の高校に通う平凡な学生だ。

そんな俺がなぜ不幸だ。などと呟いているかというと、

家の都合……というか親の用事に無理矢理付き合わされていたせいで、

全然、出席日数が足りてなかったからだ。

具体的に不足している分の日数をいうと、30日ぐらいだ。

つまり簡単に説明すると、留年してしまったってことだ。

さっきまでソレ関係で先生に呼ばれてたしな。

「……まあ、そんなわけで明日からまた1年生なわけですよ」

今までの疲れをとるかのように大きなため息をつく俺。

「さて、せっかく近くまで来たんだしコンビニでアイスでも……」

『お譲ちゃん、可愛いね』

『ちよつとお兄さん達と遊ばない？』

『いやあ、ちよつ離してよ……！』

学校からの帰りにアイスでも買いに行こうと

コンビニの前を通ろうとしたとき、コンビニ前の横断歩道で男2人が女の子

……美少女の腕を無理矢理掴んでいるのを見てしまった。

……これは助けるべきだよ。見てしまったからには。

そう決心し、足元に落ちていた空き缶を男に向かって本気で投げる。
「いたっ……だ、誰だ!？」
男に当たった缶は近くに置いてあったゴミ箱に入った。
……「すげえな、俺。こんな芸当が出来るなんて。
まあ、ぶつちやけ奇跡だからもう1回やってできるとは思わないけど。」

「ちょっと手が滑っちゃいました。すみません、お兄さん？」
さわやかな笑顔をしながら謝る俺。

「テメエ!!よくもやりやがったな」

「……………」

うぜえ、こいつら。せつかく人が謝ってるのに。

「おい、なんとか言ったら……がはっ」

おっと、悪い。手が滑って裏拳してしまったよ。

決してムカついたからではないからな。

「……………ああー、テメエも邪魔」

「うっ」もう1人には右ストレートを鳩尾にぶち込む。

これにより男2人が地面に倒れこむ構図が出来る。

っつか弱いなあ。一人一撃かよ。

「ああー、ホント無駄な時間を過ごしてしまったな」

そっぴい残しコンビニ二に向かおうとする。

「……………待ってください!!」

が、絡まれていた女の子が後ろから俺にしがみついてきた。

……「あっ、やばっ。当たってるし。」

でも、これで注意とかすると逆に殴られるよな。

ラノベとかでも結構あるし。……よし、黙っておこう。
「どうしたの？」

「あの、お礼がしたいの」
お礼ねえ。

「いや、別にそんなの要らないけど」

「……じゃあせめて、お名前を」

ああ、めんどくせつ。どうにかして振り切るか。

「ああ！？アレはなんだ？」

「何？」

少女は俺が指差したほうを向く。……今だ。

「……じゃあな、お嬢さん」

「あつ、ちよつと待って……」

そっいつて全力で走り去る。

……ああ、くそ。コンビニに行けねえじゃねえか。

I l s i d e o u t

「……行っちゃった」

コンビニ前の交差点で立ち止まる少女。

その視線の先には少し大人びている少年がいた。

「あの子、どこかで見た気がするんだけどどこでだろう？」

そんなことを言いながら少女は少年とは別の方向に歩みを進める。

そのときだった……

「ん？何これ」

足元に何か落ちてあり、気になったので拾って見る。

そこには【私立聖華高等学校 生徒証明書】と書かれていた。

「……これって、私が明日から通う学校じゃない。
もしかして彼もこの学校の生徒なのかな」
これでお礼が出来る。
そんなことを思いながら少女は、帰路を歩いていく。

プロローグ く出会いく（後書き）

最後までこんな駄文を読んでくださった皆様、ありがとうございます。

かなりの初心者なもので、今度の参考のためにアドバイスや感想をいただけたらとても嬉しいです。

では、また（、ー、）ノ

第1話 義妹

「ただいま」

「おかえりなさい。遅かったですね」

家に入って直ぐにリビングから出てきたのは、水無月みなつき 優奈ゆうな。

「――水無月 優奈。俺の義妹であり、

容姿端麗ようしたんれい、才色兼備さいしよくけんびなどと言われ続けている美少女だ。

髪は後ろで1つに纏めており、髪の色は茶色。

そして胸は小さすぎもなく大きくもない、丁度いい感じの大きさだ。
……俺としてはもう少し大きくてもいいんだけどね。

「兄さん？何か言いたいことがある感じが顔をしていますけど、
なにか言いたいことでもあるんですか？」

そんなことを考えていたら、

ニコリと笑いながらも目は笑っていない優奈さんがいた。

「まさかかぁー、言いたいことなんてないぜ」

「………そうですか。ならいいです」

あつぶねえー、助かった。

今回はうまくいったけど、今度はわからねえからさっさと話を進めよう。

ってか、身をもって知ったけど女の勘って怖いな。

「と、とにかく、色々あって遠くのコンビニまで行くことになったんだよ」

「……なるほど。色々あったんですね」

「ああ、そういうことだ」

そういつて俺は荷物を置いてから靴を脱ぐ。

「ああー、またこんなにお菓子ばかり買ってきてこんな言葉が聞こえたので優奈のほうを見てみると、俺がコンビニで買ってきた袋の中身を見ていた。」

……勝手にみるなよ。人の荷物を。

「……別にいいだろ。俺のお金で買ったんだから」

「よくありません!!」

もし晩御飯が食べれなくなって栄養が偏ったらどうするつもりですか?」

そんな極端な……。

「大丈夫です。ちゃんと考えて食べますから」

「……ならしいです。ご飯出来てますからちゃっちゃと食べちゃってください」

「おう……。優奈はもう食べたのか?」

「ええ、ついさっき食べ終わりました」

なんだ、一緒に食おうと思ったのに残念。

「そっか。じゃあ夕食、食べさせてもらうな」

そういつて俺は、リビングに向かっていく。

それを見届けたかのようにリビングに俺が入った後、優奈は2階に上がっていく。

ホント、良く出来た義妹だよ。

ちなみになぜ、俺と優奈の血が繋がっていないのかというと、
……俺の本当の両親は死んでしまったからだ。

なんでも14年前の転落事故で一緒に死んだらしい。

俺も転落は経験したみたいだけど、

当時、赤ちゃんだった俺だけが運良く生きていたみたい。

それで孤児となってしまった俺を水無月家が引き取ったってわけ。

はい、これが俺と優奈が本当の兄妹ではない理由だ。

「……はあ、明日から学校か」

夕食を食べた後、俺はソファーに座りながら憂鬱ってた。

「めんどくせえな。学校」

どうせもう1回、1年でさ習ったところをまたするんだろ。

ホント、めんどくさいだけだな。

ちなみに俺がバカだから留年することになったんじゃないからな。

……ただ出席日数が足りなかっただけだ。親の仕事の手伝いをして
たからだ。

まあ、今年も多かつたら先生達も対処してくれるらしいが。

「でもどうせだったら去年からしてろっての」

はあ、今更こんなことを言っても意味がないな。もう過ぎたことだし。
風呂入ってもう寝よう。

「少年、入浴中」

ガチャ

「はあ、さっぱりした」

自分の部屋に戻ると、さっそく座椅子に座りこむ。

そして扇風機をつける。……一応、タイマーを1時間に設定してつと。

「ああ〜、涼しい」

そんなことをして涼みながらTVゲームをする。

……さて、今日は2時間ぐらいで終わるところか。

明日、学校もあるしな。

第2話 〽登校前〽 (前書き)

勉強が一段落ついたので続きを投稿します。

……それにしても勉強、しんどい(一一、・、)(〇

では、前置きはこのぐらいにして、

本編へどうぞ

第2話　〜登校前〜

「……………ふわぁ〜。もう朝か」

枕元に置いていた目覚まし時計を止めてから、盛大に背伸びをする。そして体が充分にほぐれてから、ベッドから降りる。

「さてと、今日から俺も学校だけど……………」

確か学校に着いたらすぐに職員室に来てって言われてたな」

……………俺のクラスの発表とかかな？

俺以外の新入生は昨日、入学式で発表されたはずだし。

『……………兄さん、朝食ができましたけど起きてますか？』

学校のことを考えていたら、ドアの向こう側から優奈の声が聞こえた。

「おう、起きてるぜ」

『そうですか。なら早めにきてくださいね。』

ご飯が冷めちゃいますから』

了解。と優奈の言葉に返事をして、机の上に畳んで置いていた制服フレザーに着替える。

「……………あつ、兄さん。ちょっと待っていてください。」

今、お味噌汁を温めてますから」

階段を降りて、リビングに入ると

朝食をついさつき食べ終わった様子の優奈にそんなことを言われた。

「別にそんなに急がなくていいぞ。まだまだ時間はあるしな」

俺の姿を見て急ぐ優奈に一言かけ、

鞆をソファアの横に置きソファアに座る。
そして暇をつぶすためにテレビをつける。

「兄さん、朝食の用意ができましたよ」

「ん、了解」

そんなことをして時間をつぶしていると、
キッチンのほうから優奈の声が聞こえたので、返事をしてから机に
つく。

そしてカウンターに朝食が置かれていくので俺はそれを取り、
自分の前に置いていく。

ちなみに今日の朝食は……

白米・鮭の塩焼き・味噌汁だった。

「へえ、今日は和食なのか」

「……いけませんでしたか？」

珍しいな。という意味で言ったんだけど、
優奈からすると文句みたいに聞こえたみたいだ。

「いや、そうじゃなくて珍しいなって思ってたさ。

最近、洋食のほうが多かったし」

「あつ、確かにそうですね。

すみません、あんまり何も考えずに作っていたので」
何も考えずに作ってたら洋食になるのか。

……まあ、【水無月】^{みづつき}の家系の人ってほとんど皆、

洋食派だからそんなことになるのかな。ありえない話だけど。

「……なら、今日の夕食は和食にしましょうか」

「そうしようか。ってか今日くらいは俺が作るぞ」
何時も作ってもらってばっかだからな。

「ホントですか!？」

「……お、おう」

いきなりテンションがあがった優奈に若干、引きながら返事をする。

……ってかいきなりどうしたんだ?テンションが急に上がったが。

「……で、晩のことだが何をつくればいい?」

「そうですね。……親子丼が食べたいです」

親子丼か……。

材料はほとんど冷蔵庫の中にあっただけ、卵が少ないな。

……今日の帰りに買いに行くか。

「ごちそうさまでした」

「はい、お粗末様でした」

そういつて俺が食べ終えた食器を持っていこうとする。

「別にいいよ。自分で食ったものぐらい自分で片付ける」

「そうですか。なら先に学校に向かってもいいですか?」

……なんで俺に聞くんだ?勝手に行けばいいのに。

「ああ、いいぞ。俺も食器を洗ったら行くから」

そついうと優奈は、キッチンの近くに置いていた鞆を持ち、俺に「行ってきます」「と言ってリビングを出ていく。

……別に良いけど。」「行ってらっしゃい」「ぐうういは言わせてよ。普通にドアを閉められたらいいにくいじゃん。

第2話 〽登校前〽 (後書き)

あの星空の下で 第2話

いかがでしたでしょうか？

自分的には、出来は良いほうだと思つのですがどうでしょう？
もし、漢字を間違っているなど

問題点がありましたら教えてください。

できる限り改善します(、・、・、)

第3話 ～自己紹介～

「水無月、お前のクラスは1年A組。俺のクラスだ」
学校に着き、職員室に行く

川村先生にそんなことを言われた。

……てか、なんでまたこの人が担任なわけ？
普通、生徒と一緒に上がっていくんじゃないの

「ああ、普通はな」

「あれ、口に出してました？」

「いや、ただ『普通、生徒と一緒に上がっていくんじゃないの』
てな感じのことを考えているだろうと思っただけだ」

なにこの人、それってリアルに俺が思ってたことじゃん。

「まつ、要するに勘だな」

そう言っただけで笑いだす先生。

……あれは勘っていう言葉でおさまるレベルか？
全文当たってるんだけどもしかとも言い方まで。

「……そうですか。で、俺に何のようですか？」

「留年してる人は、転校生みたいな感じで自己紹介をすることにな
るから。」

今から俺と一緒にくればいい」

……げっ、マジかよ。

なんで転校生みたいな感じで挨拶しないといけないんだ。
俺、人前に立つのが大嫌いなんだけど。

「自己紹介で何ていうかぐらい考えておけよ」

「……了解です」

返事をした後、先生はすぐに席を立って一言。

「ほら、そろそろ行くぞ」

……マジですか。もう行くんですか。

「ああ、マジだ」

「……はあ、了解です」

と言って職員室を出ていく川村先生に、

若干、行きたくないな。と思いついていく。

「……じゃ、ここで俺がOKって言つまで待つてるよ」

先生と共に教室前まで行くと、すぐにそんなことを言われた。

……別にいいけど。そこまで転校生扱いしなくてもいいんじゃないか？

ガラッ

『おい、お前ら。席につけー』

うわあ、初めて教室前の廊下に立ってたりするけど、

教室内での話し声って外まで漏れるんだな。

『さっそくHRホームルームを始めたいところだが、

お前らに報告しておきたいことがある。実はこのクラスにもう1人くることになった』

先生が言った途端、教室内が騒がしくなった。

『先生……！その人って男ですか？それとも女ですか？』

『男だ。しかもレベルは高いぞ』

……先生、あなたは何言ってるんですか？

俺はそんなにカツコ良くないですよ。ってかハードルあげんなあ。俺にも先生だろ。もっと生徒のことを気遣おうよ。

とか俺が思っている間に、女子たちは黄色い悲鳴をあげていた。うわあ、この空気の中で教室に入るの？

かなり入りづらいんですけど。俺、そんなのレベル高くないし。

『静かに、じゃあさっそく呼ぶぞ。入ってこい』

「失礼します」

先生からお呼びの声が届いたので、許可をとってから教室に入る。

「……水無月 蓮です。よろしくお願いします」

簡単な自己紹介を済ました後、教室中を見渡すとあることに気づいた。

……へえ、優奈もこのクラスなんだ。

って、違う。それもあるけど、なんで席が二つも空いてるんだ？

俺だけなら一つでいいのに……

ガラッ

「すみません。遅れまし……っ！？」

いきなりドアが開き、何かに躓いた少女が俺に向かって突進してきた。

あっ、やばっ！！

そう思ったときにはすでに遅かった。

「……んっ！？」

俺は少女に押し倒され、

それだけでなく口同士が当たってしまった。

『きゃあああああー！！！』

……何、これ？

すぐ目の前に凄く可愛い女の子の顔があって、

お互いの口同士が当たってるんですけど。

これってあれだよな。キスだよな？

……って俺、会ったばかりの女の子とキスしちゃってるし！？

第3話 ～自己紹介～（後書き）

おはこんばんちわ。 ショウです。

第3話、いかがでしたでしょうか。

……自分で書いててなんですけど

主人公、良い思いしまくりですね。

皆様もこんな思いをしてみたくありませんか？

少なくとも俺はしてみたいです。

……美少女とキスってだけでテンションあがりますよね。

つてか、美少女っていつでも

特徴をまとめたりしてないからわかりにくいですよね。

やっぱりキャラ紹介ってしたほうがいいですか？

活動報告の『キャラ紹介』って

ところにご意見をいただけるとありがたいです。

では、さようなら（、ー、）ノ

第4話 ～質問～（前書き）

どうも料理が得意な男、シヨウです。

まあ、こんな情報はどうでもいいか……。

では、第4話どうぞ（＾＾）／

第4話　く質問く

あの問題^{キス}が起こったあと、どれだけ無音の空気が流れたのだろうか。自分でもわかっていなかった、そんなとき……

「…佐倉、自分の席に戻れ」

空気を変えるためか、先生は大きめの声で言う。

「は、はい！わかりました／＼」

さっきのことがあったせいか、

頬を若干、赤くさせながらも返事をする佐倉……だっけ？

「…水無月、もう一回自己紹介をしてくれるか？言わないといけないこともあるだろう」

言わないといけないことって留年のことだよな。

なんで言わないといけないんだよ。

と心のなかで呟きながらも一応、口では「了解です」と言う。

そして……

「もう一度、自己紹介をさせていただきます。」

水無月　蓮です。よろしくお願いします」

そういつて終ろうとしたが……

となりから『お前、言えよ』

みたいな感じの視線を感じたのでやめた。

「……で、俺が昨日いなかった理由は1年留年しているからです。」

なので入学式にはきませんでした、と」
全て言い終えると、
同時に『質問いいですか?』と言う声が聞こえた。

「ええ、良いですよ」

別に聞かれて困る質問はないしな。

「……なんで留年しちゃったんですか」

「親の仕事を手伝っていて、出席日数不足になった」

ホント、なんであるの人は

人にあんな難しい仕事を押し付けるのかな。

……当初は本当に殴りたくなったよ。

「で、他には何かあるか?」

「はい」

次は優奈の横に座っていた女の子が手をあげた。

「はい。どうぞ」

……って、あれ?

何処かで見たような気が。

「えつとですね。ストレートで聞きますよ」

「お、おう」

うわ、何?

そんな前置きされるとなんにもないはずなのに
怖くなってくるじゃんか。

「……優奈とはどんな関係なんですか?」

へっ？

「だって、優奈と同じで名字が水無月なんだよ？そりゃあ気になるよ」

ああ、なんだそんなことか。
びっくりした。

「普通に兄妹だぜ」

……義理の、だけど。

「ええーっ！！優奈ちゃん、お兄さんいたの？」
質問に答えると、びっくりされた。

「う、うん」

……優奈のやつ言っただけじゃなかったんだ。
別に良いけどさ。

「……まあ、確かにこんなにカッコイイお兄さんだったら紹介したくない気持ちもわかるけどね」

なにか質問してきた子が呟いたみたいだけど
こっちまで聞こえなかった。なんて言っただら？

「……明日から本格的には授業が始まるわけだが、1つ言いたいことがある」

俺の自己紹介を終えた後、先生は真剣な顔つきを言う。

「毎年、クラスから5〜6人、
学校をやめるやつや勉強についてこれないやつが出てくるが、
俺が受け持つクラスではだしたくないと思っっている」
確か去年にもそんなことを言ってたな。
まあ、去年は辞めた人もいなかったし。
俺以外、全員進級だしな。……俺は勉強についていけなかったわけ
じゃないけど。

「なのでお前らには、頑張ってもらいたいと思う。わかったな」
『はい』

……今、思ったけどさ。
入学してすぐって、

普通はこんなに賑やかじゃないよな？

去年は、本当に静かだったし。そう考えると、今年は面白そうだな。

第4話 〽質問〽 (後書き)

前書きで書いた続きなのですが、

料理で一番得意なのは、オムライスです。
理由？そんなの

好物だからに決まってるじゃん (# ^ . ^ #)

第5話 く初恋の人く（前書き）

シヨウ改め加那 翔です。

……初めての作品にも関わらず、
読んでくださっている皆様、ありがとうございます。

それで、感想とかもいただけたら、
俺はやる気がでるんだけどな。

と、作者は作者は物欲しそうに呟いてみる。

……そんなわけで第5話、お楽しみ下さい。

第5話　〜初恋の人〜

「……………はあ、めんどくせつ」

なんで入学式終わって、

次の日に体育があるんだよ。……………おかしいだろ。

入学式の次の日に体育があることも、

それにその連絡を俺にだけくれないのも。

「よし、全員着替えたな」

「先生、俺だけ体操服いるっていう連絡、
きてなかったんで持ってきてないんですけど」

「……………ああ、そうか。ならカッターシャツのまま走ってくれ
おいおい、それでいいのか？」

「……………大丈夫だろ。お前だし」

それはどういう意味ですかね？川村先生。

「まあ、いい。始めるぞ。」

全員、スタート位置につけ」

まだまだ文句は言いたいのが、スタート位置に向かう。

そしていつでも走れるようにブレザーだけ脱いで先生に渡す。

「一年生は5週で、蓮だけ10週だ」

「おい、ちよつと待て。それはおかし……………」

「スタート！！！」

俺の言葉は先生の大声でかき消された。

……………はあ、不幸だ。

そう思いながらも全力で走り、トップになる。
すると、川村先生から……
『蓮、そんな全力で持つのか？』
……持つからこの速度で走ってるんだけどな。
親の仕事を手伝ってる俺を舐めるなよ。

l i n e o u t

s i d e 佐倉 理恵

グラウンド5週を終えた一年生は、
ほとんどの人は疲れすぎたためか、グラウンドに倒れていた。
そんな中、水無月 蓮はずっと全速力で走っていた。
もう8週目なのに、体力の限界がないみたいにならずと笑顔で。

『……水無月君、ずっとあのペースで走ってない？』
『そういえばそうね。しかもずっと笑顔で』
『……でも、あの笑顔、カッコイイ／＼』
……本人の知らないところで、評価はかなり上がってるのね。

「……蓮の両親はあんなに無尽蔵な体力が

つくような仕事を蓮あいつにさせてるのか」

誰にも聞かれないようにか、

小さな声で先生は呟く。

……水無月君の両親はどんな仕事をしてるのか、
気になったため、先生に聞いてみる。

「先生」

「ん、ああ。なんだ佐倉か。どうした？」

考え事をしていた先生に話しかけると、
急でびっくりしたのかどもりながら話してくる。

「さつき、水無月君も言ってた親の仕事ってなんなんですか？」

「それが教えてくれないんだよな……」

「……そうなんですか」

先生に教えていないってどういうこと？
普通は教えないと駄目なんじゃないの。

「……ただ、一つだけ言えることはある」

「それはなんですか？」

「あいつの両親は、違法者を捕まえる専門の警察官だ。」

別の言い方をすると、エージェントとも言えるかな」

……ってことは、もしかしてかなり危険な仕事をしているんじゃない。

「その可能性は高いな。だから気にしているんだ」

「……あれ、口にだしてました？」

私がそう言うと先生は心底面白そうに笑う。

「なんで笑ってるんですか」

真剣に気にしてるのに。

「すまんすまん。その反応がな、蓮と同じだったんだ。だから面白くてな」

「私の反応が水無月君と同じ？」

「ああ、顔に出てたから言ってるやると、蓮も口に出してました？って言ったからさ。」

まあ、確かにお前とあいつは似たもの同士だけど……………」

私と水無月君が似たもの同士？

どこか似てるのよ。

そう思いながら水無月君を見る。

すると、

『君って、なんか僕に似てる気がする』

『似たもの同士、頑張ろう、ね』

今の水無月君の笑顔と、

かなり前に会った一目惚れした男の子の笑顔が重なって見えた。

「えっ？」

……………気のせいよね。

そう思いながら、体操服の中に付けているネックレスを握る。

「……………おい、佐倉。どうした」

「はいっ？な、なんですか」

いきなり先生が、目の前にいたのでびっくりした。

「……………なんですか？じゃねえよ。」

こっちはお前の様子が急に変わったから心配してたつてのに」

「あはは、それはすみませんでした」

苦笑しながら謝ると、先生は「ったく」と言いながら、

いつの間にか走り終えていた水無月君のほうへ行く。

「やっぱり、気のせいよね」

皆に囲まれて、困りながらも笑顔を絶やしてない水無月君を見ながら
呟く。

「でも、そっくりなんだよね。」

性格がよくて、いつも笑顔で、

そしてあの時、私に話してくれた境遇が。

首にかけているネックレスをさつきよりも強く握りながら、
私は誰にも聞かれないような声で呟く。

「ねえ、水無月君。」

あなたは私の初恋の人なんですか？」と。

第5話　く初恋の人く（後書き）

はい、今回は恋愛シミュレーションゲーム
とかでありそうな感じにしてみました。

まあ、勘がいい人は、

これからどうなるかわかりそうですね。

……これから忙しくなるので

更新が遅くなる可能性があります、ご了承ください。

更新する場合は『活動報告』に
書きますので、見てください。

第6話 〽放課後〽 (前書き)

加那 翔です。

若干、更新が遅れてしまつてすみません。

なるべく遅れないようにしますので、

これからも応援、よろしくお願いします。

第6話　〜放課後〜

「では、今日の授業はこれで終わりだ。

全員、気をつけて帰れよ。……っと、言い忘れるところだった。

お前ら出来るだけ部活には入るように。以上、解散」

それだけ言っつて川村先生はとつとと教室を出ていく。

……去年と全然変わってないな、この人は。

まあ、これがこの人の良さなんだろうけど。

「んーっ」

1日の疲れをとるように背伸びをする。

「……兄さん」

背伸びをしていると、不意に話かけられる。

この声と呼び方は……

「んっ？…ああ、優奈か。どうした？」

「今日、家に理恵さんと呼んでいいですか？」

「別に良いけど、理恵さんって誰？」

他の人の自己紹介を聞いていなかったせいか、全然、人の名前と顔が一致しない。

「佐倉理恵って言っつて、朝、兄さんがキスした相手ですよ」

ああ、あの子か。

………そういえばキスしてしまった事を謝ったりもしないといけ
ないな。

「いいぜ。呼んでくれても」

「はい、ありがとうございます兄さん」

「気にすんなっつーの。じゃ、俺はスーパーに寄ってから帰る」
鞆を肩にかけるようにして持ち、手を振りながら教室をでる。

俺達だけじゃないのなら、今日は、少し品数でも増やそうかな。

確か今日の晩御飯は、親子丼だったよな。

外で親子丼を頼むと、何がついてきたっけ？

親子丼と漬け物……これは確実についてるだろ。

後は……味噌汁か。

もうこれでいいかな。

「てか、佐倉は和食でいいのか？」

ふとそんなことを思った。

まあ、いいや。少し多めに買っておこう。

……それなら急に料理を変えることも出来るし。

でも急に変えたら何に変えるか。

今の冷蔵庫の中の状況を考えると、

洋食ならオムライスは確実に出来るな……卵は追加で買わないと駄目だが。

……で、後はサラダでもつけていたらいいだろ。

「……おっと、通りすぎるところだった」

晩をどうするか考えていたら、

いつの間にか店の前を通り過ぎかけていた。

……ここが俺の駄目なところなんだよね。

集中しすぎると、周りのことが見えなくなるところが。

とにかく、自分が作れる料理の材料を買ったらいいかな。

……親の仕事を手伝って、

かなりのお金をもらってるから余裕あるしな。

第7話 〱秘密の場所〱（前書き）

最近、小説を書く時間がない
加那 翔Death!!

今回も良い出来だと自分では思っているので、
楽しんでいってもらえると嬉しいです。

最後に作者から一言

……ストックを作っておくことにしようかな？

第7話 〈秘密の場所〉

「……ただいま」

玄関の扉を開け、挨拶を試みるが返事がなかった。

しかも靴もないし、

二人でどっか遊びにいつてるのか？

「まあ、いいや。」

優奈達あこいつがいない、今のうちに晩御飯を作るっておくか
どうせいつかは帰ってくるだろ。

そう思い、俺は晩御飯を作ることにした。

I I Side out

優奈 Side

私は今、理恵さんと一緒に街中をうろろろしていた。

理由は、私に話があるみたい。

だけど人前では話したくないらしいので、とある場所で話してみたい。

そして来た場所は……

「……やっぱりこの辺りって、いい景色よね。まだ星は出てないけど」

「理恵さん？どうしてこの場所を知ってるんですか」
このときの私はかなり動揺していたでしょう。
だってここは……

兄さんに教えてもらった星空が綺麗に見える秘密の場所だったので
すから。

「10年ぐらい前に、
教えてもらったのよ。男の子にね」

「……………」
その男の子って、もしかして……

「でも、それ以来男の子とは会えなかったの」

「……………なんでですか？」

「その男の子は、引越したみたいで会えなかったのよ」
やっぱり、その男の子は兄さんだ。

私は理恵さんの話を聞きながら、そう思った。

私達はこの秘密の場所からかなり近い場所に住んでいたのだけど、
両親の仕事の関係上引越すことになり、
この場所から遠く離れた今の家に引越したのだ。
それが10年前、理恵さんのいう男の子がいなくなった時期と同じ。

……………私にはもう、

理恵さんがいう男の子が兄さんだと思えなかった。

「…………今日、優奈のお兄さんを見たとき、その人にそっくりだったの」

そういい終えた後、一息つきある言葉を言う。

「優奈、知ってたら教えて。昔、この近くに住んでたことあった？」
質問の答えは、はいだ。

「…………ただど私は…………」

「…………いえ、住んだことないですね。」

この星空が綺麗に見える場所のことは知ってましたけど「
と嘘をついた。

理由はそう、昔からあった思いからだ。

「そう、じゃあ人違いね。」

「ごめんなさい、急にこんな話をしちゃって…………さて、帰りましょ
うか」

「そうですね」

それから理恵さんと話しながら、家に帰る。

…………ごめんなさい、理恵さん。

そう心の中で謝りながら。

第7話 く秘密の場所く（後書き）

感想・誤字指摘などなど、

絶賛、受付中ですので気楽に送ってください。

ちなみに制限していないので、

登録をしていない方でもいけるはずです。……多分。

第8話 く夕食会

「……遅いな、あいつら。どこでなにやってるんだか」

あれから20分ぐらいで、親子丼と味噌汁を作り終えたのだが、
優奈達あいつらが帰ってこない。もう一時間は過ぎてるのに。

……どこまで遊びに行ってるんだ？

ガチャ

「ただいま戻りました」

おっ、噂をすればだな。

「おかえり」

「お邪魔します」

なら、帰って。と言おうとしたけどやめた。

てか言ったら空気に酷いことになる。

「おう、まあゆっくりしてけ」

「あっ、兄さん。今、晩御飯を……」

優奈が急ぐ様子でキッチンに行こうとするが、

俺は優奈と佐倉をソファに強制的に座らせる。

「バーカ、今日は俺が作るって約束だったろ」

「そうでしたね。すみません、色々あって忘れてました」

まあ、確かに色々あったな。

留年して新しいクラスになったたはいいが、佐倉と事故とはいえキス

しちゃったし。

それにかかなりの距離を走り終えてからの、女子の目つきが少し変わったし。

……ホント、初日から色々ありすぎだな。これから持つかな俺。

「まあ、確かにそうね。

私なんかいきなりキスしちゃったし」

「そんな言い方するなよ。

アレはアクシデントだろ」

キッチンに行って料理を温める。

「うう、まあ、そうなんだけど。初めてだったのにな」

「……そんなの言っただったら、俺も初めてだったの」

「「えっ!?!」」

おい、コラ。

何だ、その反応……。

てか、何でお前も驚いてるんだよ優奈。

「えっ、でも兄さんは、篠崎深琴さんとキスしたんじゃない」

はっ？俺が生徒会長とキスしただけ？

「私も、噂でそんな事を聞いたけど」

「へえー」

噂を流したやつを見つけたら、絶対にそいつが嫌がる噂を流してやる。

「……そ、それにキス以上の事もしてるとか／＼」
前言撤回、そいつを見つけたら殺す。
泣いて謝ってもな。

「でも、キスをした記憶もないならこの噂はデマね」
「当たり前だ」
そんな経験したこと、一回もないしな。

「……とにかく話を戻しますけど、本当に付き合っていないんですね」
「？」

「おっ」
戸惑うことなく、優奈の質問に答える。

「……でも、一体どうしたんだ？」
今日……いや、佐倉と帰ってきてから様子が違うような気がする。
なんかピリピリしてるような。

「……気のせいかな」

「何が気のせいなんですか？」

おっと、口から出ちゃってたみたいだ。

「何でもない」

と言うと、優奈はわからないというように首を傾げる。

おい、その仕草はやめろ。

……可愛すぎるから。

「……」

そんな感じで、優奈と話していたら不意に佐倉の視線を感じる。

「佐倉？」

「……なに」

声をかけると、少し不機嫌そうな声で返事をもらっ
てか、俺が何したってんだ。

「あのさー、「名前」……へっ?」

「だから名前よ、名前」

いや、言ってる意味がわからないんだけど。

「あー、もう!これから私のことは名前で呼びなさいって言ってん
の」

ああ、そういうことね。了解っす……。

「理恵」

「わ、わかればいいのよ。わかれば／＼」

頬を赤くさせながら言う理恵。

それにしても……

「さっきのが、地のお前か?」

「あっ、その……あれは」

俺が何気なく言った言葉で、理恵の頬がさっきよりも赤くなる。

「まあ、どうでもいいけど。俺はどっちかで言っつと、さっきのお前
のほづが好きだぜ」

理恵に微笑みながら言う。

すると言われた本人……理恵は、

「……………／＼／＼／」

ゆで上がったタコと間違えそうなぐらい顔を真っ赤にして絶句して
いた。

あれ、なんでそんなに怒ってるんですか?

俺、そんなに悪いことした。

「なあ、優奈」

「……………何ですか?」

気になったので、何故か若干、不機嫌な優奈に聞く。
「なんで理恵は怒ってるんだ」と。

すると優奈は

「……兄さんは天然の女誑しですね」
そう言っつて、キッチンに向かって行った。

……女誑しつてなんだよ。

第8話 く夕食会（後書き）

次回の更新予定日は、8月1日を予定しています。

ですが、少しでも遅くなったりする場合は

【活動報告】に書きますのでご覧ください。

第9話 〽推薦競技〽 (前書き)

かなり更新が遅れてしまってますみません。

文字数も少なく、書く時間も少なかったので、
完成しませんでした……本日、やっと完成しました。

楽しんで読んでくだされば幸いです。

第9話　〜推薦競技〜

「あつ、水無月君だ。おはよー」

「おう、おはよう」

翌日。寝過ごした俺は急いで学校に向かっていたのだが、

途中に、クラスメイト（かなあ？）の1人に出会ったので、

軽く挨拶をして一緒に登校することにした。遅刻上等。

……ん？昨日、あれからどうしたんだって。

結論から言うと、何もなかったです。

普通に夕食を食べて、

理恵が家に帰って終わったので何も面白いことはないので語りもしません。

で、現在は、偶然出会ったクラスメイト（だと思う）の女の子と一緒に登校中つと。

ちなみにクラスメイト（だろう）の女の子の外見を言うと、

桜色のセミロングで、軽くウェーブがかかっている。

そして男なら誰でも気になる部分は………くらいかな？

「あっ！」

「っ!？」

不意にクラスメイト（仮定）の女の子が声をあげる。

俺はそれにかなり驚く。

理由は、疚しいことを考えてたのを気づかれたのかと思ったからだ。

「どうした？」

「水無月君って、自己紹介のときいなかったから。私の名前、知らないよね？」

「まあ、そうだな」

聞いてないのに知ってたらおかしいし。

……いや、先生に聞いてたとかだとおかしくはないか。

「私、【相川奈緒】あいかわなおよろしくね。水無月君」

「よろしく。相川」

それから色んなことを話したが、割愛する。

1つだけ言うとしたら、仲良くなったってことぐらいだな。

ガララッ

「………すみません」

「遅れてすみませんでした」

無事、教室の前についたのだけど、時間はすでに8時40分を過ぎ
ていた。

………つまりは、10分遅れだ。

「お前ら、遅刻した理由を言ってみろ」

「「寝坊です」」

不機嫌な先生が、少し怒り気味で言ってくるのだが、

俺らは気楽に言いきる。

「お前らな〜……まあ、いいだろ。席につけ」

「了解です」

俺が席につくと、同時に相川も席につく。

「……さて、全員。そろつたから言つが、さつそく学校行事として、

来週に球技大会がある。親睦を深めるという意味もあるが、

優勝したクラス全員に図書カード五千円分がもらえる……」

先生が言い終える前に、教室に感激の音が響きわたる。

それにしても勝つたら五千円の本が買えるようになるのか……良いかも。

「こら、お前ら。これから続きを話すから静かにしろ」

その言葉を聞いた後、全員が静かになる。

……そんなに欲しいのか、図書カード五千円分。

まあ、かく言う俺も欲しいけど。換金してもいいし、本を買ってもいいしな。

「で、その競技は、各クラスで決めることになっている。

そして、一番要望が多かった競技になるっていうことだ」

まあ、去年と同じだよな。

それにしても、球技大会か。

どんな競技がいいかな？球技大会の競技か……。

お決まりっていうか、定番で言ったらサッカーや野球、バスケとかだよな。

「で、球技をお前らに決めてほしいんだが、何かあるか？」

うーん、どれがいいんだろうな。

サッカーでもいいし、野球やバスケでもいいしな。

どれをやっても面白いし。

そんな感じでみんな、考えていたのか、無言だったのだが。

「先生、サッカーでいいんじゃないっすか？」

と、男子クラスメイトAの言葉をきっかけに……

「ええーっ！！サッカーより野球にしようぜ」

「いやいや、そこはバスケだろ」

てな感じにみんなして意見を言い合っつ。

そして男共が騒ぎ足す。ーめんどくさいな。

そんなことを思っていたら、おもむろに川村先生がすぐ近くまで来た。

「……蓮、纏めてくれ」

本人は心底、めんどくさそうな表情をしながら言っつ。

「なんで俺が纏めないといけないんですか!？」

「いやいや、お前しか適任がないんだ。」

現会長に頼りがいのあると言われたお前しか……」

“それに、うるさいのは嫌いだろ？”

まあ、確かにうるさいのは嫌いだけどさ。

でも、まっ、先生に貸しを作れるならいいかな。

「先生、貸し1ですよ？」

「ああ、なんでもいいから頼む」

先生の良い返事を聞いた俺は、気分よく教卓にたつ。

「お前ら、静かにしろ」

机を中くらいの力で叩く。

それにより教室ないに机を叩いた音が響き渡り、

あれだけ騒いでたみんなが、急に静まりかえる。

「さて、静かになったところで纏めるが、

出てきたのはサッカーと野球とバスケット、ドッチだよな?」

俺が聞くと、何人かの男が首を縦にふる。

「……で、これは全て男共の意見だが、女子は何か意見あるか?」

と、話しながら、俺は男共の意見を黒板に書いておく。

「水無月君。私は、バレーボールがいいと思います」

「私も」

バレーボールね。黒板にバレーボールと追加する。

「他に意見があるか?」

そういうが誰も手を挙げないところを見ると、ないのだろう。

「じゃあ、この中から決めようと思うが……」。

先生、もともとから決まってる競技ってなんですか?」

「おっと、それがあつたんだつたな。すまんすまん」

悪びれた素振りもなく、ただ単に謝ってくる。

「そうだな、野球とバレーとドッチボールはあったな」

「……それじゃあそれ以外はないと」

「……それは、サッカーかバスケのどっちかだよな。」

「そうだな。それ以外は無い」

「なら、話は早い。」

「サッカーかバスケ……どっちか選べ。」

「多数決で残りの競技を決める。それじゃあさっそく多数決を取るぞ」

そして多数決をとった結果、

「……ということで、後は先生にお任せします」

それだけ言い残して自分の席につく。

「……すまん、蓮。助かった。」

ウチのクラスの推薦競技はバスケットボールということとで報告しておく」

「ーちなみに推薦競技ってというのは、

読んで字の如く、クラスが推薦する競技のことだ。

「ーしかし、バスケか。」

バスケに決まったらバスケをするのも良いかも。

第10話 生徒会長 前編 (前書き)

はい、新しい小説を書き始めた加那 翔です。
なので、そちの小説のほうも

よろしくお願いします。m ((m <

ーと、まあ、宣伝もしたところで本編へどうぞ

第10話 く生徒会長 前編く

「これで直ぐに決めておかないといけない問題は全て終わったな。お前らが賢いおかげで直ぐに決めることが出来た。サンキュー」
球技大会の推薦競技を決め終えた後、
クラス委員だの、色々決めることがあったが、比較的簡単に決めることが出来た。

「でも、ほとんどクラスを纏めたのが俺ってどういうことなんだろうな。」

そのせいか、勝手にクラス代表にされたしよ。

「じゃあ、残りの10分間は自由時間だ。あんまり騒ぐんじゃねえぞ」

それだけ言って教室を出ようとする先生。

ああ、クラス行事が早く終わったから、屋上にサボリに行くのか。

「……ああ、そうだ。すっかり忘れてたぜ」

先生は教室から出る直前、思い出したかのような声を出して教卓に戻る。

そして教卓の中から封筒と小箱を取り出し……。

「蓮、これを持って2年A組に行ってくれ」

俺に向かってそんなことを言うてくる。

はいっ！？なんで俺がそんなことをしないとイケねえんだよ。

ってか、俺の前のクラスメイトがいるクラスじゃねえかよ！！

「ちなみに、生徒会長命令だそうだ。

クラスでの決め事が終わったら、至急、2年A組にコレを持ってこいと」

「……マジかよ」

なんで俺なんだよ。他にもいるだろう。

とも思ってたが、あの人の性格を思い出し考えるのをやめた。

――あの人は突拍子なく色んなことをしてくるから、何を言っても無駄だろうしな。

「……それにしても、なんで至急じゆないとダメなんですか？」

「さあな、俺も詳しくは聞いてないから知らねえ」

先生から封筒と小箱を受け取る。

怪しいものが入ってたりしてないよな、この小箱。

小箱を怪しく思いながら、俺は教室を出て2年A組の教室を目指す。

2年A組、教室前の廊下

「はあ、なんか急に帰りたくなってきた。ってか、リアルに腹が痛い」

「――これが嫌な予感ってやつか。」

教室前廊下に来てから本当に急に腹が痛くなってきた。

「でも、俺を呼ぶってことは、俺に用事ってことだよな。」

あの人だから本当に用事かどうかも怪しいけど」

かなり腹が痛い、それを我慢してドアをノックする。

コンコン

「失礼します」

ノックをしてから教室に入ると、お前なんでここにいるの？的な目をされた。

俺だって知るか……。なんでここにいるのかわかんねえもん。

――まあ、生徒会長さんに呼ばれたからだけだな。

「ええっと、なんででしょうか？水無月君」

声をかけてきた人を見てみると、黒いスーツを着ている女性だった。この服は制服じゃないから、先生か。ってか、なんでこっちに川村

先生はきたんだろつな。

普通は生徒と同時に上がるだろ。……他のクラスを見て変わった
なかったし、

というか、この言葉、前にも言った気がするな。

「……すみません。ちよつとこのクラスに用事ができましてね」

「はあ、用事ですか？」

それだけ言つて、俺は後ろのほうの席に座つてる人のところに向か
う。

「ちよ、水無月君!？」

そして俺を呼び出した生徒の机に封筒と小箱を置く。

「おお、もう終わったのか。早かつたな」

「……おかげさまでな。 temeエが川村先生に

『水無月はリーダーシップがあるからオススメしますよ?』的なこと
をいつてくれたからな」

ある程度、生徒会長の声に近づけて言つてみる。特に理由はないけ
どな。

「いやいや、私が言ったのは

『いやあ、あいつの統率力は凄いですね』と褒めただけだぞ?」

「……そうですか」

つて、ことはあの人の方が勝手に解釈しただけなのかな。

「では、これで用事は終わったので失礼します」

「おい……」

そういつて俺は、2年A組の教室を出る。
後ろで生徒会長が何か言っていたが、気づかない振りをしてながら。

第10話 く生徒会長 前編く（後書き）

……やべえ。全然、話の続きが書けねえ。

なのになんで俺は別の小説を書いてんだよ。
アホか、俺は。

第11話 生徒会長 後編 (前書き)

おはようございます、加那 翔です。

本日は皆様に報告したいことがあります。
詳しくは本編を見たあと、後書きをどうぞ

第11話 く生徒会長 後編

「……で、ここはこの公式を使つてー」
会長からの呼び出し？からは、普通に授業を受けたり、
学食で昼食を食ったりして普通に過ごしていた。

そして現在、俺は放課後直前はかなり眠たくなることで有名な六時
間目の最中だ。

しかも数学だし。数学が苦手つてわけではないんだけど、
一番眠たい時間に数字みてたら眠たくなるんだよね。

……つて、ついさつきまでスルーしてたけど、
なんで入学式の二日後に普通に授業があんだよ。おかしいだろ。
と、心の中で愚痴る。口にだして言っても、意味ないですからね。

三

「はい、ではチャイムもなったことですし。
今日はこのくらいにします。明日も数学があるので、予習・復習は
しておくように」
先生はそれだけ言い残して教室を去っていく。

「……はあ、やっと終わった〜」
途中、何度も船を漕いでいたが、無事に寝ることなくすんだ。
いつも寝ていたためか、数学の時間だけずっと起きてるのがしんどいんだよな。

「兄さん、大丈夫ですか？ずっとしんどそうでしたけど」
「あなたのことだから、寝ないでゲームでもしてたんじゃないの？」
「……ちげえよ。ただ夢見が悪かっただけだ」
そのせいで学校にも遅れてしまったしな。
……なんであんな夢を見てしまったんだろうな。

「へえ、まあそついうことにしてあげるわ」
「サンキュー」

まあ、俺が言った言葉は本当のことなだけだな。

「……………」
そんな感じで理恵と話していると、優奈が暗い表情で何か思い込んでいた。

「優奈、どうした？」

「い、いえ、何でもないです。ところで兄さん、球技大会何にでますか？」

「そつだな……………」

野球とかでも良いけど、やっぱりバスケットボールかな。
結構、バスケット面白し。

「……バスケかな」

「バスケットボールですか。なら私もそれにします」

「良いのか？そんな理由で決めて」

なんか俺がバスケにするからバスケにしたみたいな感じでなんか嫌なんですけど。

まあ、優奈が決めたなら良いけどさ。

「その他にも兄さんと一緒だと、

簡単に球技大会で優勝できるっていう特典もありますしね」

おいおい、そんな期待されてもな。俺、そんなに運動神経良くねえし。

「それに個人的にバスケットボールは好きですし……」

……そういえばそうだな。

優奈って中学時代、女子バスケットボール部に入ってたことあったし。

「そっか、なら良いか。理恵も一緒にバスケするか？」

「えっ、私も入っていいの？」

バスケットボールなんてあんまりやったことないんだけど」

「別にいいんじゃないか？」

こういうのは楽しめば良いんだからさ」

俺がそういうと目の前にいる二人とも同時に笑う。

「なんで笑ってんだ？」

「ふふっーいえ、別に」

「ただそう言ってる割りには、顔に『絶対に勝ってやる』って出るのよ」

そうか……？

まあ、試合や勝負つてなると絶対に勝ちたいしな。
なんていうか負けず嫌いってやつなのかな。俺って。

ガラッ

「おい、HR始めるから席につけー！」

優奈達と話をしているといきなり教室の扉が開き、
先生が入ってきたので俺達は急いで席につく。

「……これで全員、揃ってるな」

そして全員が席についたあと、人数を確認する。

「ええっと、今日でお前らが入学してから2日経ったことになるが、
雰囲気が独特なのこの学校には慣れたか？」

自分で言うなよ。仮にも教師でしょうがあんたは。

まあ、雰囲気が独特なのは認めるけどね。

「まあ、学校生活には徐々に慣れてくれれば良い。そしてー」
それから何分かは、川村先生には珍しく真面目な話だった。

「で、これが最後の話となるが、部活動についてだ。

明日一日使って部活動紹介をするから、

興味がある部活を見つけたらできるだけ入って欲しい。これで俺か
らの報告は以上だ」

部活動ね……。

去年はあまり行けてなかったし、そろそろ行ったほうが良いかな。

「ああ、そうだ。最後に一つ。」

水無月兄は明日、7時に来て部室に來いだよ。

その代わり、朝のSHRにはこなくていいからな」

「……了解です」

明日の朝、7時からだよ。

なんか明日の出し物の打ち合わせでもするのか？

三

「そういえば兄さんが入ってる部活って何ですか？」

学校からの帰り道、俺は優奈と一緒に帰っていた。

一応、家が近いから理恵も誘ったのだが、

『今日は他の友だちと遊ぶから一緒に帰れない。ごめん』と、
言ってきたので俺達、兄妹だけで帰っているというわけだ。

「ん、俺か？一応、放送部に入ってるけど」

「一応ですか？」

「おう、一応な」

ちなみに俺が入ってる放送部の説明をすると、色々してるとしか言
いようがない。

現在では生徒会長をしているあの人が放送部の部長でもあるからな。

あの人が関わると面倒なことになるから来てほしくなんだけど、

生徒会の仕事をきちんと終わらせてから来るもんだから、
『生徒会の仕事をまず終わらせるや』みたいな文句も言えないんだ
よな。

「それじゃあ私も放送部に入ろうかな。理恵さんも誘ってになりま
すけど」

「良いんじゃないか。」

他に入りたい部活がなかったらだけどな」

「なら、他に入りたい良い部活がなかったら放送部にいきますね」

「了解、あの人にも一応、言っておくよ」

俺達はそんな話を楽しくしながら家に帰っていた。

だが、この時間にもあの人の計画（悪巧み）が刻々と進んでいたこ
とを俺は知る由もなかった。

第11話 く生徒会長 後編く（後書き）

なんと『あの星空の下で』PV1万突破しました!!

ワイ、パチパチパチ（*´、*´）。

……報告は以上で

す。

第12話 く悪巧み

翌日の朝、俺はいつもよりかなり早めに起きた。

理由は、放送部……もといあの生徒会長さんの呼び出しのおかげだ。まったく少しは他の人のことを考えろっての。

「あ、兄さん。今日は早いですね。

どうしたんですか？」

いつもより早く起きる俺に驚く優奈。

悪かったな、普段から起きる時間が遅くて。

「ほら、昨日 先生に言われただろ？ 『水無月兄は明日7時にくるように』って」

「……そういえば言っていましたね」

おいおいたった1日で忘れたのかよ。

まあ、仕方ないっちゃあ仕方ないかな。

俺もさっきまで忘れてたし。

「でも、どうしましょう？ まだ朝食の用意が出来てないんですが」

「ああ、別に気にするな。途中でなんか買っていくから」

コン コンに寄って、おにぎりとうま〜いお茶でも買うか。

そつえば期間限定で牛カルビっていうおにぎりが出てたようなならそれにもしてみるのも良いかも。

「そうですね……、ならお金を」

(また、こいつは……)

続きを言おうとした優奈の口に人差し指を当てる。

「だーから、前にも言っただろ。」

それはお前のお小遣いなんだから、俺に渡すのはおかしいって」

「ですけど……／＼／＼」

なぜか顔を赤らめて、俺を見てくる優奈。

「良いから。俺もお小遣いをもらってるからそれを使ってるの。いいいな？」

「はい、わかりました／＼」

ついさっきまで顔を赤に染めていたためか、まだ優奈の頬は赤かった。

……てか、リアルに聞きたいんだけど、なんで優奈は顔を赤くしたんだよ。

「んじゃ、行ってくるわ」

「はい、行ってらっしゃい。」

放送部、理恵さんと見に行きますね」

「来んな」

笑いながら言ってくる優奈に軽口を叩きながら家をでる。

「で、なんでこうなるんですか？美琴さん／＼」
家を出てから20分後、学校一階に存在してる放送部部室に俺はい
た。
のだが、状況がかなりおかしいことになっている。

「うん、可愛いよ。蓮ちゃん」

(……ホント、なんでこんなことに)

なぜなら俺が現在着ている服が、女物だからだ。

～10分前～

「確か部室って、ここだよな」

俺の記憶を辿ってついた場所は、南館一階のとある部屋だった。

「……でも、こんな感じだったっけ？」

ふとそう思ってしまうのも仕方ない。

そう思えるほどおかしくなっていた。……こう、空氣的に。

「なんか急に帰りたくなってきた」

会長の呼び出しだからな。帰ったら悪化するような気がするんだよ
ね。

「まっ、帰らなくても悪化はするけどね」

ガシッ、という効果音がついたかと思うくらい力強く腕を掴まれる。

「……会長？な、なにを」

「良くも去年は、私に仕事を放り投げてくれたわね」
「仕事……？なんのことだ？」

意味がわからないんですけど。

そう思っていた時間は束の間消える。

（あれっ、ちょっと待てよ。なんか当てはまる件があるんだけどな
んだったかな）

部活？ーいや、違う。

クラス委員？いや、違うな。

クラス委員は、会長が……

「あっ！？クラス委員補佐」

「正解」

「ちよっ、待て！！アレには事情が……」

具体的には親の超危険な仕事をしていて、
学校にくる事自体、超無理だったんですけど。

「問答無用！！」

そう宣言し俺を部室に引きずって行く会長。

「り、理不尽だーっ！！」

第12話 く悪巧みく（後書き）

はい、加那 翔です。

さて、いかがでしたでしょうか？

最近、羨ましいことばかりあったので、
蓮さんには酷い目にあってもらいましたWWW

第13話 く腐れ縁く（前書き）

加那 翔です。

前回、キリは良いところで終わったはずなのですが……

この話だけ見ると、意味がわからなかったのが、
前回の最後の方を最初に少し載せました。

決して文字数稼ぎではないのであしからず。

第13話 く腐れ縁く

「で、なんでこうなるんですか？美琴さん／＼」
家を出てから20分後、学校一階に存在してる放送部部室に俺はい
た。
のだが、状況がかなりおかしいことになっている。

「うん、可愛いよ。蓮ちゃん」

(……ホント、なんでこんなことに)
なぜなら俺が現在着ている服が、女物だからだ。

く10分前く

「確か部室って、ここだよな」

俺の記憶を辿ってついた場所は、南館一階のとある部屋だった。

「……でも、こんな感じだったっけ？」

ふとそう思ってしまうのも仕方ない。

そう思えるほどおかしくなっていた。……こう、空気に。

「なんか急に帰りたくなってきた」

会長の呼び出しだからな。帰ったら悪化するような気がするんだよね。

「まっ、帰らなくても悪化はするけどね」

ガシッ、という効果音がついたかと思うくらい力強く腕を掴まれる。

「……会長？な、なにを」

「良くも去年は、私に仕事を放り投げてくれたわね」

仕事……？なんのことだ？

意味がわからないんですけど。

そう思っていた時間は束の間に消える。

（あれっ、ちょっと待てよ。なんか当てはまる件があるんだけどなんだったかな）

部活？ーいや、違う。

クラス委員？いや、違うな。

クラス委員は、会長が……

「あっ！？クラス委員補佐」

「正解」

「ちよっ、待て！！アレには事情が……」

具体的には親の超危険な仕事をしていて、学校に行く事自体、超無理だったんですけど。

「問答無用！！」

そう宣言し俺を部屋に引きずって行く会長。

「り、理不尽だーっ!!」 12話「悪巧み」より

……そうだった。

無理矢理、部室に引きずり込まれたんだ。

そして会長に全てを丸投げした罰という意味で女装させられてるんだった。

(アレだな。人間、嫌なことはリアルに忘れるもんだな。さっきまですっかり忘れてたよ)

「どう、可愛いと思わない? ヒロくん?」

会長は部室にいる男子生徒に話しかける。

「そうですね……。これはかなりレベルが高いですね。可愛いですよ、蓮」

「うるさい」

女装した俺に可愛いと言ってくる、この金髪天然パーマの名前は

加藤 浩紀【かとう ひろのり】。

俺の幼馴染み……。もとい腐れ縁だ。

「はあ、またツンですか？

せつかくデレさせたのに、また攻略しなおさないと」

露骨にため息をつき、文句を言いまくる浩紀。

……気のせいかな？

俺を見て言いやがった気がするんだが。

「……浩紀。お前、何の話をしてるんだ？」

「何の話ってそりゃあ、水無月蓮ちゃんの話に決まってるじゃないですか」

その言葉を聞いた瞬間、ブチツという音が俺の頭から聞こえた。

「誰がツンツンだ！

しかも一回もデレたことねえし、これからデレるつもりもねえ！

後、お前に攻略されたつもりもねえぞ！」

今まで溜まっていたストレスを全てぶつけるように、浩紀に大声でツッコム。

「ええーっ、それじゃあの夜のこと嘘何ですか!？」

「あの夜のことって、何だよ」

俺の記憶の中に、こいつと夜に会った記憶はないんですけど。

「僕が不良に絡まれていたとき、助けてくれたじゃないですか」

ああ、そんなこと合ったな。

うん、あつたんだが……

「お前が不良に絡まれていたのは朝だろうが!!」

「あれ、そうでしたっけ？」

「ああ、そうだったの。勝手に捏造するな!!」

こいつが朝っぱらから駅前で絡まれてたから、めんどくさくて助けたんだっただけかな？

どちらかといえば、めんどくさいというか不良がうるさかったの方があつてるな。

そんな感じで浩紀と言い争っていると、会長は……

「まあまあ、夫婦喧嘩はそれぐらいにして」

とか、抜かしやがった。

それに俺は『誰が夫婦だ!!』と言いたくなつたが、言った後、めんどくさくなりそうだからやめた。

と、いうか……高確率で絶対、めんどくさくなるし。

「まずは蓮ちゃんに説明しないとね」

「説明？」

何の話だ？ 後、蓮ちゃんって呼ぶな。

「これは今から35日前のことじゃった」

「いや、そんな昔話ネタみたいになんか言わなくていいから」

てか、今から35日前って何日だよ。えっと、今日が4月15日だから……3月10日か。

うわっ、時期的に何の話かわかつちまった。

「ぶー、仕方ないわね。なら普通に話すわ」
「（それが普通とは思いませんが）お願いします」
「アンタの日頃の口調って、そんなんだっただけ？
なんか違うような気がするんだが……。」

「……卒業する直前、去年の部長さんが言ったのよ」
「何てですか？」

「以外に普通そうな話だったので、真面目に聞くことにした。」

「『蓮に女装させなさい』って」
「なんでだよー!!」
「前言撤回、全然マトモな話じゃねえや。」
「というか、話が飛びすぎて意味がわかんねえ。」

「『というの、冗談で……去年の部長が言ったのよ。』
『全然、部活に来ていない蓮にたっぷりとお仕置きしてあげて』
『っ
て』

「はあ、なるほどね。」
「で、思いついたお仕置きがこれってわけか？」
「そう」
「そういうことか。」

「でも、学校にこれなかったのは仕方ないと思うんだけど。
仮にも先生方に話は通してあるし。」

「……はあ、わかった。」

で、これでお仕置きは終わったよな？帰っていいか」

一応、無理矢理とはいえ着たんだから良いよな。帰っても。

「いえ、ダメよ。」

これから部活紹介なんだから、それで出てもらっわ」

この人、なんて言った？

男の俺にこの姿で新入生全員の前に出ると。バカじゃないの!？

「はぁー！ー！？そんなの却下するに……」

「却下すると、これより露出が多い衣装を着せますよ」

「……わかったよ。出ればいいんだろ」

現在、着ている衣装はありきたりなメイド服。

だが、これより露出が多い衣装となると着たくないの、おとなしく従っておく。

第14話 〈部活紹介〉（前書き）

第13話の続きです。

なので、13話を見てから見ることをオススメします。

第14話 〈部活紹介〉

そして時間は流れて。

『……どの部活もかなり楽しそうですね。そう思いますよね？みなさん』

現在、部活紹介の時間だ

俺は舞台袖で憂鬱になりながらも、出番をまっていた。

（なんかアクシデントが起こってなくなったりしないかな？）
しまいにはそんなことを考えていたほど憂鬱になっていた。

「出番は、次ですけど。大丈夫ですね？」

言葉は全て女の子の口調でお願いしますよ」

「……わかってる」

女の子口調か、難しいこと頼んでくるよな。

「ーというか、なんで一番最後なんだよ。」

最後となると、注目度が変わるじゃねえか。

なんか急に出たくなくなってきたな。そう思った。

『次で最後の部活紹介となります。……放送部です。どうぞ
だが、現実は無情だ。』

全然、甘くもなんともない司会者の呼び出し（ラブコール）を受け
る。

「」では、よろしくお願いしますよ。蓮

とどめと言わんばかりに、後ろから幼馴染の応援の言葉が届く。
(別にそんな応援はいらねえ。)

ってか、ぶっちゃけプレッシャーしか感じないんだよ!!!(

『おい、放送部ー!?どうしたんですか?』

「ほら、呼んでますよ!!!っ」と

「おっ、おい!!!」

浩紀に背中を押され、舞台に出してしまう俺。

そんな俺を見てキョトンとする全校生徒達。

ーっって、ちょっと待て。

なんで全校生徒がいるんだ、1年生だけじゃねえのかよ!!!

「え、ええっと、これから放送部の説明を始めます」

空気はさつきと変わらず凍ったままだが、

さつきと終わらせたいので説明をし始める。

「私達、放送部はどんな活動をしているのかと言うと、

ラジオ・映画作成・音楽作成など色々なことをしています。

……まあ、ぶっちゃけていうと放送関係なら何でもありませんね。

なので放送関係の活動に興味のあるかたは、

是非、放送部に来てください。以上です」

『……あ、ありがとうございます』

司会者の言葉を無視して、俺は舞台裏へと向かう。

「……蓮、ナイスです」

その途中、浩紀が満面の笑みを浮かべ、

親指をたてながら言っていたので、一発、蹴り飛ばす。

「ぐはっ」

「……一回、死んどけ」

超恥ずかしかつた部活紹介を終え、俺達は部室に戻ってきていた。

「はぁ……、やっと終わったよ」

椅子に深く座り込み、ため息をつく。

……もう、こんなことはしたくない。

「お疲れさまでした。どうぞ、ジュースです」

気遣うように缶ジュースを渡してきた浩紀。

「おお、悪いな。助かるぜ」

(悪乗り癖がなかったら、完璧なんだけどな。こいつは)
缶ジュースを受け取りながら思う。

「そついえば、あいつは？」

「あいつ？」

ああ、あいつじゃあわからないかな。

「ああ、深琴さんですか？」

「おう」

俺があいつ、と言った人物をピンポイントにあてられ、ビックリする。

「良くわかったな」

「まあね、蓮のことなら何でも知ってますよ。それに何でもわかります」

「……………すぐに出てこなかったくせに、良く言っつよ」
浩紀から目線を逸らし、小さい声で悪口を言う。

「ー確か蓮の初恋の相手は……………」

「あゝゝ、悪い。俺が悪かった」

浩紀が何かを言おうとしてたので、すぐに止める。

そうだった、こいつには話しちゃったんだよな。
初恋の人の話。

(今頃、どうしてるのかな？)

あの女の子は……………)

当時、かなりシャイな子供だったからか、名前を聞けなかったんだよね。

一応、一緒に遊んだりはした仲間だけだ。

「……………って、おわっ!?!」

考え事をしながら作業をしていたせいか、
部室のところどころに転がっているケーブルに引っかかり倒れかけ

る。

……やばっ、このままじゃ浩紀に。

「おっと……」

大きな荷物を持ち運んでいる、浩紀にぶつかって大惨事になる。思っていたのだが、そんなことにはならなかった。

「大丈夫ですか？ 蓮」

「ああ、大丈夫だ。あ……」

ガラッ

「二人ともー！！」

新入部員が二人、増えたよ……」

「「あっ……」」

タイミング悪く、俺が浩紀に寄り添っている状態のときに会長が帰ってきた。

そしてその後ろには、新入部員二人……というか、ぶっちやけて言うつと優奈と理恵がいた。

あっ、最悪だ。

一番、見られなくなかったやつらに見られた。

「……ごゆっくり」

私っば空気を読める子。

みたいな感じの表情をして部室のドアを閉める会長。

「ちょっと待って。」

これは事故、事故なんだって」

『ええ、わかっているわよ？事故なんですよ？』

なんだわかってるのか。良かった。

『だから……ええっと、1時間ぐらいあればいいかな？』
1時間あれば何がいいってんだよ。

「はい、充分です。」

それぐらいあれば蓮と続きができるので
「ん？続きができる？」

……ま、まさかな。

あれ、この会話の様子だと会長はわかってないのか。
ってことは、言う言葉は一つしかねえよな。

「だから、誤解なんですってば——！」

「つまり蓮ちゃんがケーブルに足をとられ、倒れかけたところをひる君が助けたと。そういうことだね？」地獄の部活紹介を終えた後、起こってしまった小さな問題の話を俺達はしていた。

「んだけど、なんか納得出来ないことがあるんだよね。」

「はい、そんな感じですね」

「……………」

「蓮ちゃん、どうなの？」無言になっていた俺に話しかけてくる會長。

「いや、あってるんですけど……。なんでちゃん付けなんですか？さっきから抱いていた疑問、どうしても気になったので聞いてみる。」

「だって、こんなに可愛い子なんだもの。ちゃん付けしないとおかしいよね？」後ろで話を聞いていた優奈と理恵に話を振る。

「ええ、そうですね。こんなに可愛いんですから。……ホント、男のクセになんでこんなに可愛いのか」

最後のほう、聞こえなかつただけでなんだろう？

聞きたいんだけど、聞きたくない気もするんだよね。

なんか聞いちゃ負けみたいな感じがして。

「やっぱ理恵ちゃんもそう思うわよね？」

「え、ええ」

なぜか戸惑いながら答える理恵。

「じゃあ優奈ちゃんはどっ？」

「そうですね……………」

優奈、お前だけは俺の味方だよな？

そんな思いを込めて、優奈を見つめた。

「……可愛いですよ。姉さん」
「はずだったのだが、現実是非情である。」

……優奈、お前だけは俺の味方だと思ってたのに。

「ゆうなあ〜」

「ふふっ、ごめんなさい。」

私は嘘、つけないんですよ」

微笑みながら言う優奈。

お前、絶対、嘘つけないっていう嘘をついてるだろ。」

「……絶対、嘘だろ」

そう小さく呟くと、優奈は――

「なんですか姉さん。お仕置きしますよ？」

（1週間、どんな料理にも兄さんの嫌いな食材をいれますよ？）
「普通に脅してきた。」

……ってか、1週間ずっとナスを入れられるなんて耐えられないな。」

「ごめんなさい」

その場で土下座をする。

プライド？なに、それ？

「そんなに許してほしいの？」

「はい」

……っ。

「いつまで続ける気だ。この茶番をーっ!!」
我慢の限界がきたので、全力でツッコム。

「えっ、いつまでって、最後まででしょう？」

「ですよ？現在も撮っている深琴さん」

「はっ？」

「現在も撮ってるって、どういっこと？」

振り向くとビデオカメラをこちらに向けて構えてる会長がいた。

「……会長」

「あーあ、バレちゃった。もう、せっかく最後まで撮ろうとしたのに」

「残念そうに言う会長。」

「だが顔は全然、残念そうではなかった。」

「ホント、この人は……」

第14話 〽部活紹介〽（後書き）

主要キャラのイラスト

描いてくれる人、募集中ですWWW

ま、描いてくれる人はいないと思いますけどね。

第15話 腐れ縁その2

会長から新入部員二人を紹介された後、俺たちは学校内をブラブラしていた。

勿論、普通の男物の服でだ。

「お前ら、あの部活に本当に入る気なのか？」

「ええ、入りますよ。」

だって、面白そうじゃないですか」

いや、全然面白くないんだが。

「まっ、私は他に気になった部活もないしね」

「そっか……。でも、後悔するなよ」

「後悔はしません」

と、言い張る優奈と理恵。ま、忠告はしたからいいや。

「そっか、なら頑張ってくれよ」

「おお、蓮じゃん。久しぶり」

優奈達と話し込んでいたら、ふと後ろから俺を呼ぶ声が聞こえる。

その声が聞こえたほうを向くと、学校指定の体操服を着て、

黒髪短髪でパーマを当てている男が目に入った。

確か……こいつは――

「……和弥か？」

「おう、そうだけ。」

去年、一緒にバカやってた和弥だけ」

野崎和弥^{のやまがすけ}。

俺の腐れ縁その2兼元クラスメイトだ。

そっぴや、こいつとはかなりバカやってたんだよな。

色んなことをしでかしたな。……そのたびに先生に怒られて。

「まさか忘れていたわけじゃねえよな？」

「んなわけねえよ。バーカ」

若干、忘れかけていたことを隠し軽口を言う。

「で、バスケはまだやってんのか？」

「おう、今から実践練習だけ。良かったらするか？」

実践練習か……。

バスケ初心者の理恵に見せるには良いかもな。

「良いのか？」

「ああ、いいぜ。今日は新入生達に見せるためだしな」

ああ、そっか。

文化系は体育館で自己PR的な発表だけど、運動系は各自の練習風景を見せるんだよな。

ホント、こういう時だけ運動部が羨ましくなるぜ。

練習するだけでいいんだから。さつきみたいに女装する必要も……。

……やべえ、思い出したくないもの思い出しまったぜ。

「そんじゃ行こうぜ。」

理恵にバスケのコツとか教えられるかも知れないしな」

「……そうですね。行きましようか」

俺のテンションが若干、上がっちゃってるからか知らないが、優奈と理恵はビックリしていた。

ま、優奈は少ししてから冷静になったのか、すぐに返事をしてくれた。

……なんか呆れながらだったけどな。俺の行動、なんか変だったか？

「ええ、わかったわ」

「よっしゃーっ!!」

二人の許可もとれたし行こうぜ、和弥」

妙にノリノリの俺を先頭に、俺達は体育館を目指す。

ちなみに俺がノリノリな理由は単に運動が出来るからだ。

つまりバスケじゃなくてもサッカーや野球でも良いってわけ。

そんな性格なのに運動部に入らなかったのは、練習がめんどくさい

って言うのが本音だ。

頑張ってる練習してる人には申し訳ないけど、練習なんてめんどくさくてしたくないんだよな。俺は。だから部活に入ることなく試合形式の練習が出来るといっ話だから乗ったというわけです。

「おーい、みんな。」

かなり急だが、珍しい観客が来たぜ」

体育館に入っすぐ、和弥が大声で言い放った言葉はコレだった。珍しい観客って……。そんなに珍しいかよ俺。

「おう、了解。新入生達はここで見ておいてね。」

俺達は今から二つのチームに別れて試合形式で練習するから」

部長らしき人は、見学をしにきた新入生達にそれだけ言ってからこちらに向かってくる。

やっぱり試合形式の練習か。ま、かなり面白そうだから良いよな。

「そうだな……。和弥、お前のチームにそいつを入れる。こっちはもう、定員一杯だからな」

「了解です」

おっ、和弥と一緒にのチームか。

やっぱり見知ったやつと一緒にのチームだとやりやすいかな。

「蓮、それじゃあコレを着ろ」

和弥に手渡された物、それは和弥達も着ている赤色のユニフォームだった。

「はいはい。わかりました」

別の場所まで行くのがめんどくさかったので、その場で着替えることにする。

「……出来れば違う場所で着替えて欲しかったんだけどな」

そんな俺を見て、和弥は何かを呟いた。

「ん？何か言ったか？」

「いや、別に……。それよりも今からチームになるやつの名前を覚えてくれ」

「ああ、了解。

番号と名前を言ってくれ。それだけで覚えられる」

一応、バカやってたけど、頭的な意味ではバカではないしな。

「……1番、稲村。2番、お前。3番、松下。4番、高橋。5番、俺だ」

「了解」

ま、俺は番号だけで判断し、ボールをパスするから関係ないけどね。

結果、俺達が5ポイント差で勝った。
その結果には、俺と和弥以外全員が驚いていた。

「……………やった」

誰かが呟いた言葉。

それをキツカケに皆がはしゃぎ出す。

「やったーっ！っ！やったと先輩達に勝った！」

「よっしゃーっ！っ！これで未来の部長は俺に……………」

「ないない。それは絶対にねえよ。」

あるとしたら未来の部長は和弥だし、それに無茶苦茶、先の話をするな」

そんな感じにはしゃいでいるのを見守っている俺と和弥——そして対戦相手の先輩方。

「ま、これはこれで自信はついたかな」

そう呟く俺を驚愕の表情で見ってくる和弥。

「……………いつ、気づいたんだ？」

「ん？ ほんのついさっきだが。もしかして俺を誘ったのは、先輩に勝つ喜びや自信をつけさせるためなのかな、ってな。

だって俺、運動関係だと強いしね」

【水無月蓮、運動神経抜群説】は和弥達、

元クラスメイト達全員、知っていることなので自慢気に言ってみる。

「自分で言うのはどうかと思うぞ。」

「ま、お前が運動神経が凄いのは納得だけだな」

「だろ。まあ、お前の作戦はうまく言ったから良いんじゃないか？」
汗を垂らしながら和弥と話す。

「つーか、和弥のやつ。なんでそんなに汗をかかないんだよ。」

「……ああ、そついやお前は今回、
パス出するか、シュートするにしても3ポイントシュートだけだった
な」

「最近、ロングシュートに憧れてるんだよ。」

「だからやってみたんだが、意外と出来そうだな」

「おいおい、お前の仲間が憧れ、」

「そして勝ちたかった先輩方に対してお前は本当に練習してたんです
か？」

「ーもう少しは本気でやろつぜ。」

「そう思った俺は悪くないだろう。」

「あ、あの……」

「ん、どうかした？」

「声が出た方向を見ると、黒髪のショートボブカットで、」

「バスケットと同じユニフォームっぽいものを着ている女の子がきた。」

……っぽいものと言った理由は、一つ。見た目が少し違ったからだ。なので、本当に一緒なのかわからなかったというわけなのです。

「コレ、どうぞ。使ってください」

女の子の手には洗ったばかりらしいタオルと、プラスチックで出来ている入れ物があった。

……確か、このプラスチックの飲み物を入れる入れ物の名称って、スクイズボトルだったっけ？
まあ、どうでも良い話だけどね。

「サンキュー、助かるよ」

「あつ……／＼／」

それを躊躇なく受け取る。というのも、

かなり疲れているから色々と考えてらんないし。

なんか女の子の頬が赤く染まったような気がするけどどうしたのかな？

「はー、生き返るー」

スポーツドリンクをゴクゴクと遠慮なく飲んでから言う。

「……蓮。少しは色々と考えて行動しろ」

「和弥、何の話してるんだ。あ、コレ、ありがとね」

微笑みながら女の子にお礼を言う。

そしてそれと同時に女の子にスポーツドリンクを渡す。

すると女の子は――

「あ、いえ。

これが私の仕事ですので……／＼／＼」

俺が渡したスポーツドリンクが入っている

スクイズボトルを受け取り、そういつてくる女の子。

私の仕事というってことは、

この女の子はバスケット部のマネージャーなのかな？

「それにしてもだよ。

バスケット部じゃない俺に、そこまでしてくれるなんてさ。

気が利いてるといっかなんというか。

なっ？ そこは自信を持って言い張って良いと思っぜ。

超個人的な意見だけど、気が利く女の子って、俺、かなり好みだし」

「っ……／＼／＼し、失礼します／＼／＼」

急に顔を赤くして近くから立ち去るマネージャーの女の子。

あれ、なんか変な事言っちゃったか？

「……蓮、お前は本当に女誑しだな」

「はっ？ ちょ、何の話だよ？

っーか、俺が女誑しなわけないだろ」

俺みたいなやつが女誑しだったら、

世の中の男のうち、ほとんどが女誑しだろ。

「……しかも、自覚なしかよ。

ホント、知佳も大変だな。――色々な意味で」

「おい、ちょ……和弥!？」

それだけ言い残して、和弥はどこかへ向かった。

自覚がない、ってどういうことさ!!

そして知佳って誰だよ!？

それから家に何事もなく帰ったのだが、
ずっと和弥の言ってきた言葉によって悩まされ、
今晚は眠れなかった。というのは余談である。

イラスト、書いていただきました) ^ ^ (前書き)

イラスト、書いていただきました(^ ^)

リアル友達にイラストを頼んだ結果、
書いていただくことができました。

それがこちらになります。
では、どうぞ

一応、キャラ紹介の文も追加しておきます。

主人公、水無月 蓮

水無月^{みなづき} 蓮^{れん}

性別 男

年齢 16歳

所属 私立聖華高等学校1年A組。

容姿 肩口まで伸ばした鮮やかな黒髪。

体型は可もなく不可もなく標準的。

補足 本当の両親は14年前に転落事故で死んでおり、

親戚に育ててもらってたんだが、その親戚が死んでしまい、
孤児になった。

そんなとき、拾ってもらったのが水無月家の人で、
本人はその恩を返すために両親の仕事を手伝っている。

> i 3 2 4 0 8 | 3 5 3 3 <

> i 3 2 4 1 0 | 3 5 3 3 <

> i 3 2 4 1 1 | 3 5 3 3 <

いやあ、本当に上手いですよね。
友達からコレを受け取った瞬間、ビックリしましたもん。

コレを俺の小説のキャラにしてもいいのか？
とリアルに躊躇いましたからねwww

イラスト、書いていただきました) ^ ^ (後書き)

これを見てくださっている方の中でも、

「俺、絵に自信あるんだ」という方がいましたら、

是非、募集してしますので、ドンドン送ってください。

……というよりも、みてみんなに投稿してください。

目についたら、勝手に取り上げますのでww

第16話 球技大会直前

「よっしゃあ、今日は球技大会本番だぜ!!」

「なによ。いきなり大声をだして……」

朝の教室、いきなり大声を出した俺に冷静にツッコム理恵。

「ああ、悪い悪い」

「そうだよな……」。

テンションが上がってるからって大声を出すのはダメだよな。

「……はあ、もういいわ」

謝る俺を見て、理恵はため息をつく。

えっ、俺、なんかため息をつかれるようなことをしたか？

「理恵さん、すみません。」

兄さんはこんな性格なので……」

「でしようね。あなたの苦勞がわかるわ」

女子二人は俺の目の前で俺の事を話し合っていた。

……この空気、嫌なんですけど。居た堪れないとでも言うのかな？

「……まあ、こいつの性格は大体、わかってたから別に良いけどね」

なら、俺に怒らなくても良かったんじゃないのか？

俺の性格を知ってたなら……ん？

俺の性格が大体、わかっていたってどういうことだ？

昔にこいつと会ったことはなかったはずだけど……。

「俺の性格がわかってたってどういうことだ？」

「えっ？ ああ、昔にね。アンタとそっくりな人がいたのよ。」

見た目とかそういうことじゃなくて、性格がそっくりとでも言うのかな？

負けず嫌いで……、特に遊ぶことが好きな人がね」

そりゃあまた、俺にそっくりだな。

俺的に合ってると思うのは、負けず嫌いってところだけだな。

だってさ現在は、遊ぶの大嫌いなんだぜ？

昔は遊びが好きだったけどね。

鬼ごっことか隠れんぼとか、昔は色々としたな。

俺達だけの秘密基地とか作ったりとかもしたな……。

「……それは兄さんにそっくりですね。ビックリするくらい」

「でしょう。完璧にそっくりよね？」

うるせー、と反論したかったのだが、

二人の楽しそうに笑いあっている表情を見てやめる。

――こんなに笑い合ってるのに、邪魔をするなんて野暮だよな。

第16話 球技大会直前（後書き）

今回は短いです。

すみませんm(_ _)m

第17話 球技大会（前書き）

中間テストやら、色々とありまして

遅れてしまったこと、まことに申し訳ありませんでした。

第17話 球技大会

「……あー、今日は待ちに待った球技大会だ。今までの練習成果を存分に出して欲しいと思う」
約1週間ほど、ずっと練習してたからな。その成果ぐらい出さないとな。

「それに今月、買いたい本が大量にあるから、絶対に買ってってくれ……もといて勝ってくれ。いいな。

あ、そうそう、SHRが終わったらグラウンドに集合だからな。遅れんなよ」

言いたいこと全て言うだけいって、先生はさっさと教室から出ていく。
まったく、去年と何一つ変わってねえな。

「んじゃあ、俺らも更衣室に向かいますか。着替えないといけないし」

「そうね。それにしても川村先生ってホント、嵐のような人よね」

「ああ、そうだな。嵐をそのまま人に見てみた感じだからな」

あ、それじゃあ嵐に失礼かな？

「……あ、水無月君。」

「一緒のチームだね、よろしくー」

俺に声をかけてきたのは前にも話したことがある、軽いウエーブのかかっている女の子だった。

「ああ、よろしく」

確か相川奈緒だったかな？

たぶんそんな感じの名前だっただろう。

「で、あと一人なんだけど……」

「お前らがバスケット組か？」

短髪の男が話しかけてきた。

「そうだけど」

もしかしてこいつが最後のバスケットメンバーか？

「そうか、ってことはお前らとバスケットをするのか。」

俺の名前は、佐上^{ひがみ} 恭平^{きやうへい}って言うんだ。ま、よろしく頼む」

「ああ、よろしくな。二人とも」

手を差しだしながら言う。

それだけで意味はわかったのだろう。

二人とも「こちらこそよろしく」と言っ、手を握ってくれる。

「……ところで二人とも、バスケットをやったことは？」

「ないですね。バスケットを選んだ理由も、あのなかでは楽しそうだったからだし」

「……私も。マネージャーならしてたんですけどね」

やっぱりそんなところだよな。
運動するのが好きなやつなんて、あまりいないし。

でも、マナージャーをやったという人が入ってくれるのは助かるな。

運動はともかく、ルールは知ってるのだから。

「じゃ、相川は理恵に最低限のルールを教えてやってくれ。
学校行事だから、そんな深いルールはいらなと思う。だから簡単
なところだけで良いから」
具体的な例を出すと、ボールを持って歩けるのは3歩だけ、とか。
そんな感じのものを。

「了解です。あ、でも佐上君はどうするんですか？」

「俺達は男だぜ？」

着替えながら大雑把に説明するに決まってるじゃん」

「はあ、先輩のことだからそんなことだと思いましたよ」

あれ、バレちゃった？なんかアレだよな。

俺って、わかりやすいのかな。

「つーか、俺相手に先輩は入らないぜ。

敬語もなしで良い」

「あ、そうですか。」

じゃあ蓮さん、で良いですか？」

蓮さん……か。

もっとフランクで良いんだけどな。

歳上の人にすぐに敬語無しとかは無理か。

「まっ、良いんじゃないね」

満面の……とは言えないが、とにかく笑顔を浮かべながら言う。

「……っと、そろそろ行かねえと向こうでゆっくり出来ないぜ」

急かすような俺の言葉で、はっとする4人。

……お前らなあ。

第17話 球技大会（後書き）

……ヤバい、この話の続きがかけない。

他の二つの作品はすぐにかけるのになんでだ？

ってな、わけでこの小説は

これから不定期更新になると思います。

本当にすいません。

なんか今回、謝ってばっかですね。自分……。

第18話 準決勝直前

まあ、そんなこんながあり、
今は既に球技大会が始まつてる時間帯だ。ちなみに今は準決勝第1
試合だ。

準決勝までの対戦相手は弱かった。
ほとんど俺と理恵だけで決めてきたし。
まっ、これはシュートを決めたのが。だからな。

二人でバスケとか軽く無理ゲーに近すぎる。

「…………準決勝まで来ちゃったな」

「あれ？蓮さん、準決勝まで来たのになんかノリ気じゃないですね」
今年は大丈夫だと思うけど、気が気で仕方ないんだよな。

「…………ちよつと、な。」

そろそろ会いたくないやつが来るかもって思ったんだ」

「へえ、彼女ですか？」

「違いえよ。しかも会いたくないなら彼女じゃねえだろ」

「いやあ、妊娠させちゃったのかなーと」

お前な…………。

と、こいつの発言をきいて、俺の頭が痛くなっていく。

「してないから」
「チエツ、残念」
今、ふと思っただけど、
こいつ、順応性高いな。
先輩扱いしなくても良い。って言うてから何分だよ。
普通に馴染んでやがるし。
それに敬語もなくなってるしな。

「……で、その人と蓮さんはどんな関係なんですか？」
あいつと俺の関係ねえ。
当てはめるとしたら、アレかな……。

「ライバル」
的な……、みたいな。
「ライバルですか？」
「ああ、一時期バスケット部に所属していたときがあつてな」
「なるほど……、そういうことですか」
1人、納得したかのように首を何度も縦にふる。

「ああ、まあそういうわけだ」
「……蓮」
後ろから俺を呼ぶ声が聞こえた。
「……この声は、あいつか。」
「……噂をすればなんとやらってな」
ため息をつき、そんな台詞を言う。
いい終えた後、声のあった方角……後ろの様子を見るために振り向

く。

姿を確認した俺は、またしてもため息をつく。
やっぱりそうかよ。

はあ、俺の予想通りか。

なんで外れないんだよ。

と、思う俺。

「なあ、優花」

「……そうだね」

俺の言葉を聞き、微笑む優花。

彼女の名前は【星野^{ほしの} 優花^{ゆうか}】。

去年のクラスメイト兼元カノだ。

第18話 準決勝直前（後書き）

今日は文化祭、二日目なので楽しんできます！！

ちなみに自分は接客業ですww

頑張って、声を出しますよ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3730u/>

あの星空の下で

2011年10月28日08時17分発行